

一. はじめに

広大フォーラム二十六期一号の「開かれた学問」の欄に、「水辺空間を魅力あるものに」という主題のもとに「水辺環境研究グループ」の提案と研究の概要が掲載されています。大学の構成員が、自らの研究教育の環境に目を向け、良好な環境づくりにために提言を行うことは、悦ばしいことであり、大いに歓迎するところです。しかし、その提案の内容を見ますと、何でこのような提案をされたのか、首をかしげざるを得ないところが見られます。研究グループでは、今後さらにここに示した提案の具体化、詳細化に取り組まれる予定というのですが、その前に広島大学西条キャンパス整備の実情を明確に把握しておく必要があると思います。それを欠いた調査や整備計画の提案は、実現不可能であるばかりか、場合によっては自然景観の破壊につながりかねません。

そこで、ここで移転に伴う西条キャンパスの整備方針からみた「水辺環境グループ」の提案の問題点を指摘するとともに、これまで大学が行ってきた移転に伴う施設整備計画の必要な部分を再度説明して、構成員各位のご理解を得るとともに、「水辺環境グループ」の今後の研究が整合性を持った発展をすることを期待します。

二. 施設整備計画の情報公開について

広島大学の西条キャンパスの基本計画は、一九七九年から八〇年にかけて四冊の冊子に分けて公開し（施設配置計画、学内交通計画、緑化計画、屋外工作物等の配置計画）、大学の全学部の各講座に一冊ずつ配付するとともに、概要を「学内通信」（現フォーラム）の紙上に載せて全構成員に周知するようにとめています。

もっとも最初の計画が策定されてから十五年も経っていますから、学内外の情勢の変化によって変更された部分も多くあります（例えば北地区の施設配置計画や全体の駐車場計画など）。移転に伴う整備計画の情報は膨大なものがありますが、それらは計画立案中のものを除いて、全て公開されています。ただし、多くは生資料のままで、一般に縦覧できるように整理されていませんので、実施計画委員会専門委員会に教員二名を配属させ（施設部分室内線82-3878）、必要な情報は整理して提供するように努めています。

施設の整備状況の概略については事務局が毎年パンフレットを発行して、進捗状況がわかるようにしています。部数に限りがあるため、全構成員に配付することはできませんが、必要に応じて提供できる体制に

なっています。

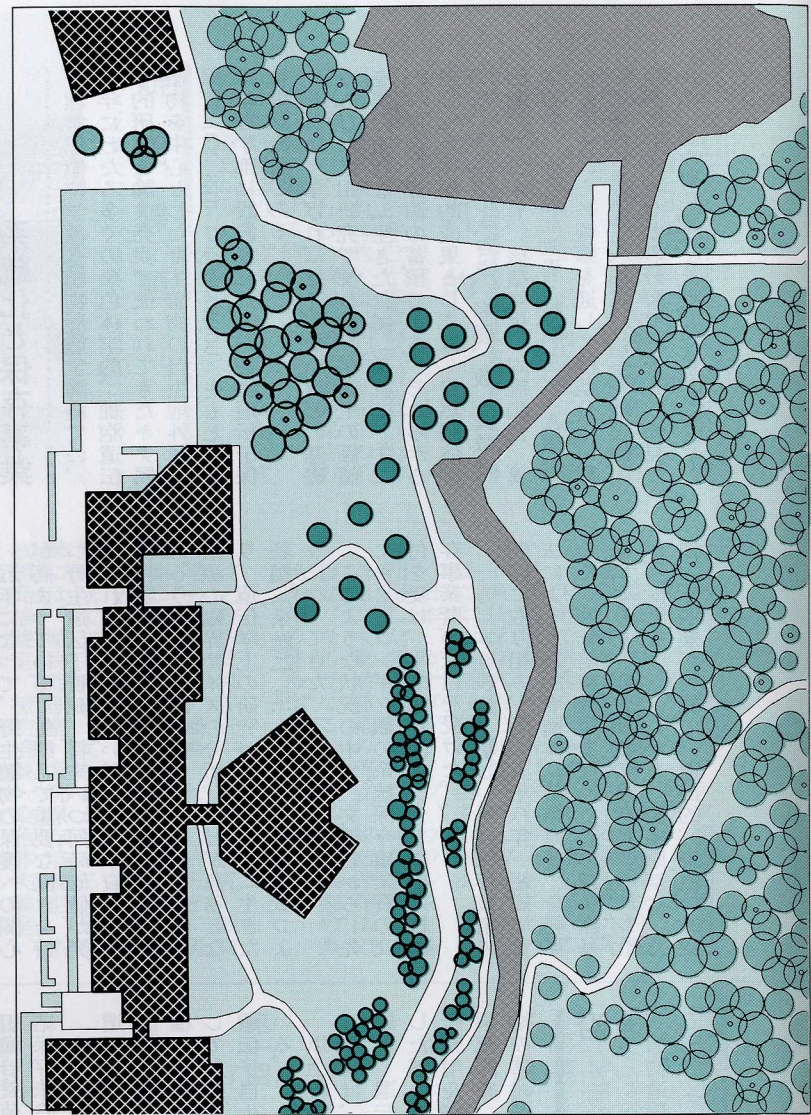
三. 土地所有、水利権および地質などの条件について

西条の広島大学キャンパスの敷地は、広島大学の要請によって地域整備公団が土地の買収と造成を行い、その中から広島大学が必要とする部分を文部省が買上げたものであり、山中池、角脇川の水路、角脇調節池およびプール、下見中郷線などの道路はその中に含まれていません。角脇川の水路（ぶどう池中の水路も含む）と角脇調節池は建設省の所有で広島県が管理している土地です。山中池とプールなどの道路は東広島市の所有であり、広島大学の範囲は境界杭で明示してあります。また、山中谷川と角脇川は広島県の砂防指定地内河川であり、川の中心から左右10mの間の利用は厳しく制限されています。山中池および角脇調節池の水利権は地元の水利権者に属して、広島大学は一切利用できないことになっています。

一方、角脇川の両岸は粘土質の西条層からなり、土質がもろく酸性をおび、表土の形成が不十分（厚さ約10cm）で、地皮植物が育たず、裸地になった部分も少なくありませんでした。ぶどう池は角脇川を堰止めて造った灌漑用の池であり、堰堤の下から

# ぶどう池周辺に残されたアカデミック地区の原風景を大切に保存しよう

統合移転実施計画委員会 専門委員長 鈴木 充



図「ぶどう池南堤付近の整備計画」

東に張り出したこと、なごから、西岸の現風景を広い面積で保つことが望めなくなつたため、代わって工学部西の松林を保全し、総合科学部の東は、角脇川の管理用道路までを緩斜面にして、川辺まで近づける緑地にする。同時に、ぶどう池南堤下西側の三角地も松林などを植樹した広場として整備し、総合科学部の緑地の少なさを補うよう、計画を変更し、現在工事中です。

したがって、アカデミック地区の原風景を保全する地区は工学部西の角脇川東岸から、ぶどう池周辺、下見中郷線までの角脇川両岸となります。

六. 終りに

以上、西条キャンパスの総合計画を立案した立場から、ぶどう池、角脇川周辺に対して、現在大学が進めている整備計画について説明しました。今回の「水辺環境研究グループ」が整備計画として行った提案は、総合計画立案の過程で検討し、諸般の事情から環境破壊を招くものとして取り止めたものであることがわかりました。

長い間続いた西条キャンパスへの移転計画も、やっと終りを告げる時期が近づいてきています。総合計画に基づく施設整備計画は、移転完了時までのもので、それ以後のキャンパスの保全整備計画はまだ考えられていません。この機会に、大学が早く将来の整備計画を考える組織を発足させることを期待するとともに、これまでの整備計画を進展させる方向で、構成員各層からの建設的な提案が寄せられるように望みます。（すずき・みつる）

五. その他の問題

報告の中に「ぶどう池の水質が悪化している」という指摘がありますが、これは何を基準にしたのか分りませんが、論評できません。広島大学ではぶどう池の水質検査は行っておりませんが、角脇調節池の南放出路付近では定期的に二十四項目の水質

ぶどう池角脇川間の水辺公園化も、たとえば両岸をつなぐ飛び石を設けた場合、五十年豪水時の流量確保のため、両岸の護岸を更に高くする必要があり、結果的に人と水面を更に遠ざけることになるため、広島県土木事務所の整備に任せることにしました。

このような過程を経て、総合計画ではぶどう池から下見中郷線までの角脇川、山中谷川両岸を「アカデミック地区内の原風景を保存する地区」として位置づけ、人工的整備を最小限に止めることにしました。

その案に沿い、計算センター裏から東の山中谷川の両岸を理学部から要求のあった植物園の面積を含める提案を行い、理学部のご理解を得て、この地区を理学部の学術研究用地に割り当てました。ぶどう池周辺については、東南にあった沢の埋立て面や、北の椿畑川の埋立てた法面、西側の雨水排

水路設定跡など、人工的工作面が多く有り、大雨の時に一部崩壊などにより、大量の土砂が池内に流れ込んだりしましたが、自然回復を待った結果、十年近くを経て、やっと「原風景」と呼び得る落ち着きを取り戻したところです。流入した土砂を取り除き、ぶどう池を浚渫するなどの提案もあるようですが、そのようなことをすれば、また工専用道路を建設するなど、周辺の自然環境を損ねます。実用上問題がなければ、自然の回復に任せるのが上策ではないでしょうか。

ぶどう池、角脇調節池間の角脇川の整備に関しては、当初、西岸北部から学校教育学部前までの自然環境を保全し、東岸は眺望を確保するために低木樹の植込を計画しましたが、①教育系音楽棟を南に張り出したこと、②北地区共同溝の掘削面が予想以上広がったこと、③総合科学部の講義室を